

メルロ=ポンティと 〈子どもと絵本〉の現象学

—子どもたちと絵本を読むということ—

正置友子 著

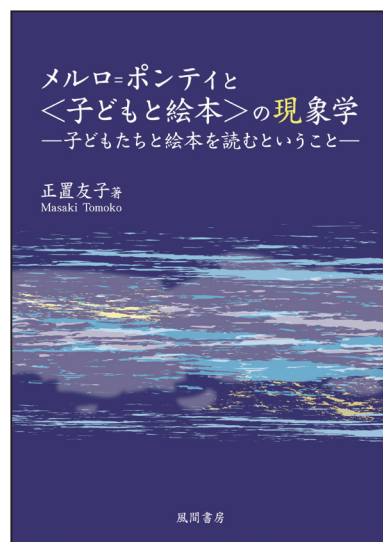
Masaki Tomoko

子どもたちと絵本を読むことがどのような意味を持つのか、この時期は人の一生のなかでどのような意味を持つのか。メルロ=ポンティの主著『知覚の現象学』を中心に、「子どもと絵本」の関係性について考察。現象学という哲学と結ぶことから生まれた、世界で最初の論考。

A5判・330頁 定価(本体 3,500円+税)

ISBN978-4-7599-2235-6

2018年10月刊・好評発売中



目次

まえがき	第III部 誕生から〈わたし〉の生成にむけて
序章 子どもたちと絵本を読むということ	—『いないいないばあ』から『おおかみと七ひきのこやぎ』へ—
第I部 私の「生」の現場、および「子どもたちと絵本を読む」という現場	はじめに—「だっこでえほんの会」における子どもたちの三年間
はじめに—私の「生」の現場	第1章 絵本『いないいないばあ』から始まって
第1章 私の「生」の現場—なぜ生きているのか、という問いから臨床哲学へ—	第2章 聴くということ・語るということ
第2章 「子どもたちと絵本を読む」現場—青山台文庫と「だっこでえほんの会」—	第3章 絵本『りんご』に、こんにちは
おわりに—子どもたちがおかあさんの膝をおりる時	第4章 絵本『もこもこもこ』で、踊り出す
第II部 メルロ=ポンティと子どもの現象学	第5章 絵本『ちょうちょ はやくこないかな』における物語の誕生
はじめに—『知覚の現象学』における子ども	第6章 絵本『三びきのやぎのらがらどん』でリミナリティ体験
第1章 メルロ=ポンティと子どもの現象学	第7章 絵本『かいじゅうたちのいるところ』—私の「ひとなった」日々との遭遇—
第2章 メルロ=ポンティと子どもの記述	おわりに—誕生から〈わたし〉の生成にむけて
おわりに—身体が比較され得るのは、芸術作品に対してである	終章 あらためて、子どもたちと絵本を読むということ
	参考文献／あとがき